

プノンペン教員養成大学 セット・セン学長のライフヒストリー ～2000 年以降カンボジアの教育の発展のためにともに歩んできた仲間～



プノンペン教員養成大学のセット・セン学長は、元々カンボジア国立教育研究所（National Institute of Education）の化学教官で、2000 年以降、パデコが担ってきた JICA の技術協力プロジェクト（STEPSAM、STEPSAM2、STEPSAM3、E-TEC）でカウンターパートを務められました。まさに 20 年以上とともに歩んできた我々の大切な仲間です。今回は、セン学長にライフヒストリーを語って頂きました！セン学長はどんな人生を歩み、パデコとの日々をどう振り返ってくださるのでしょうか！？

- まずは、幼少期について教えてください。どんな子どもで、どんな夢を持っていましたか？

私は 1970 年代の後半に、首都プノンペンから約 40km 離れたプレイヴェーン州の田舎で農業を営む家に長男として生まれました。その頃カンボジアは、ポルポト政権下の大変な時期でしたので、私の家族もとても貧しく、苦しい生活を送っていました。

しかし、私はとてもラッキーで、小学生になる頃には、家から歩いて行ける距離に小学校がありました。小学校と言っても、最初はマンゴーの木の下で学ぶ青空学級から始まり、のちに寺の宿舎で学ぶようになりました。まだまだ、カンボジアはそういう時代でした。

実は私は子どもの頃に教師を目指したことはありませんでした。典型的な田舎の子どもと同じように、政府で働いて、少しでもよい生活がおくれたらいいなど漠然と思い描いていました。

幼い頃は勉強ができたわけでもありません。妹 2 人と弟 1 人がいる長男でしたので、両親の農作業を手伝うのに忙しくて勉強どころではありませんでした。でも、1994 年に高校卒業のための試験（国家統一試験）を受ける時には必死に勉強しました。どうしても合格したかったです。

勉強の成果が出て、無事に合格したのですが、私の高校から合格したのは私を含めて 2 人だけ。プレイヴェーン州でも 8 人だけという非常に厳しい試験でした。この試験に合格したことをきっかけに、私は首都プノンペンに行って大学で学びたいと思いました。

- その大学への進学が教員になるきっかけとなったのですか？

いいえ。実は紆余曲折がありました。私がプノンペンの大学に行くことに周りの人達が反対したのです。当時の私の家族は大変貧しかったので、私のプノンペンでの生活費を援助できる状況ではなかったか

からです。プノンペンに頼れる親戚や知り合いもいなかったので余計に厳しい状況でした。

でも、私の父は寝泊りさせてくれるお寺があればなんとかなるかもしれないと私をプノンペンに連れて行ってくださいました。初めてのプノンペンでした。しかし、3 日間あらゆるお寺を訪問したのですが、残念ながら私を受け入れてくれる場所を見つけることができず、とても残念な気持ちで帰路につきました。

しかし数日後、昔の知り合いがプノンペンのお寺にいることが分かり、幸運にもその方が私をお寺に受け入れてくださいました。そのお寺には、カンボジアの麺料理クイティウを販売して生計を立てているある家族が住んでいました。私は自分の食い扶持を稼ぐために、早朝から晩までそのお店を手伝いました。勉強は夜の 1 時間の英語のクラスだけ。英語の先生は私に無料で学ばせてくれました。

クイティウのお店の手伝いが忙しすぎて大学に入学手続きに行くことすらできず、気が付くと農業大学だけがまだ受付をしているという状況でした。当時は大学に入学する前に 1 年間の準備コースに通う必要があり、私はその農業大学の準備コースに通うことになりました。その頃には、お坊さんの食事の残りを頂くことができるお寺に引っ越しもしました。調理係と仲良くしていたので、その方がいつも私のために食事をとっておいてくれました。とても有難いことでした。

1 年間のコースを終えた頃、私は 3 つの大学の入学試験に申し込みをしました。本当は農業を学びたかったのですが、合格したのは王立プノンペン大学の化学学科だけでした。ちょうどその頃、私は学生結婚をしました。妻の家族は私が滞在していたお寺のすぐそばに暮らす農家でした。そのため、私は大学で勉強するかたわら、家族と農業を行い、夜には繊維工場で働いていたこともあります。妻は貧しい家庭の子どもたちに勉強を教える小さな NGO で働いていました。それが、私が教員になる最初のきっかけでした。

- **教員になって JICA プロジェクトのカウンターパートになったいきさつを教えてください。**

1999 年に大学を卒業し、私は化学の高校教員になるために、国立教育研究所（National Institute of Education : NIE）に進学しました。そして、2000 年に NIE を終了する頃に、ちょうど JICA 技術協力プロジェクトの最初のプロジェクトとなった STEPSAM（高校理数科の教師教育プロジェクト）が始まりました。そして、教育・青年・スポーツ省（以下、教育省）が NIE で教官として働きながら STEPSAM のカウンターパートになる人材を募集することになりました。

その時、私には 2 つの選択肢がありました。

どこに配属されるかは分からないけれど、地方の高校の化学教員になるか、NIE で化学教官を務めつつ STEPSAM のカウンターパートになるかです。私にはすでに長女が生まれていたため、家族で地方に移住するよりはプノンペンでの生活を続けたいと強く願い、妻の後押しもあって、STEPSAM の面接を受けることにしました。競争率の高い、非常に狭き門でしたが、挑戦することにしました。

今でも覚えています、パデコの高橋光治さんが面接官でした。当時、私の英語はひどいレベルでしたが、間違ってもいいからとにかく話そうと必死だったのを覚えています。未だに信じられないのですが、そこで合格をして、STEPSAM に加わることになりました。

- JICA のプロジェクトでどんなことを学び、それがどのようにキャリアに活かされていますか？

JICA の技術協力プロジェクトは私にとって非常に素晴らしい学びの場でした。なかでも、STEPSAM プロジェクトは私が最も成長した期間だったと思います。研修やワークショップが頻繁に開催されており、プロジェクトの専門家との週次ミーティングもありました。そこで非常に鍛えられました。STEPSAM ではよくレポートの提出を求められたのですが、最初の頃は英語もひどかったですし、まともなレポートを作ることができませんでした。そのため、日本の専門家の方々が本当に熱心に指導をしてくださいました。そのおかげで、少しずつレポートを書けるようになっていき、英語も上達しました。心から感謝しています。素晴らしい経験ができたと思っています。



STEPSAM2 で講師（当時）を務めるセン学長

そして、STEPSAM の期間中に愛知教育大学で 3 か月の研修を受ける機会にも恵まれ、その後 JICA の奨学生として岡山大学で修士号を取得することもできました。カンボジアから帰国し、STEPSAM2（小中学校理科の教師教育プロジェクト）のカウンターパートにもなりました。

さらにその後、別の奨学金を頂いて博士号を取得することができ、続けて STEPSAM3（中学校理数科の教師用指導書開発プロジェクト）と E-TEC（教員養成大学設立支援プロジェクト）のカウンターパートも務めました。2000 年に JICA のプロジェクトに出会っていなかったら、私の人生は全く違うものになっていたと思います。



STEPSAM3 で実験の指導をするセン学長

JICA のプロジェクトをとおして、規律、責任、姿勢、時間厳守、計画を立てる方法、メンタリングの方法、コミュニケーションなど、大変多くのことを日本の専門家から学びました。

- JICA のプロジェクトを通じて学んだことを現在のお仕事にどのように活かしていますか？

JICA のプロジェクトを通じて学んだ仕事の仕方、マネジメントの方法が現在の仕事にも大いに役立っています。また、主体性をもって取り組み、創造豊かに新しい挑戦をすることが大切だと常に思っています。

カンボジアの人々の多くは自分が楽でいられる範囲で行動しようとしがちですが、プノンペン教員養成大学では、想像力をもって新しいことにチャレンジし、この国にとって新しい成果を出していこう！と、いつもスタッフに伝え、鼓舞しています。定期的な会議を設けて一緒に計画を立て、一緒にフォローアップをして、一緒に結果を検証し、一緒に課題を解決していく、そうした JICA のプロジェクトで学んだことを現在の仕事でも実践しています。

現在、プノンペン教員養成大学と附属校を合わせると約 300 名のスタッフを抱えていますが、それだけの大所帯をマネジメントしていくことは決して容易ではありません。でも、私はいつも自分の執務室のドアを開けたままにしておき、誰でも気軽に私を訪ねて相談ができるようにしています。どんな問題もと



ことん話をしないと解決できないと思っているからです。プノンペン教員養成大学では、トップマネジメントから掃除婦にいたるまでみんながファミリーだと思っていますし、教員養成の質的向上はこの国のみんなにとっての共通の目標であると捉えて取り組んでいます。こうしたマインドセットも、JICA のプロジェクトで得た財産だと思っています。

E-TEC セミナーでのセン学長（中央）、右はパデコメンバー

- これからのキャリアで達成したい目標はありますか？

特にこうなりたいという具体的なキャリア目標があるわけではありませんが、この国の教育がもっと発展していく姿を見ていきたいと思っています。すべての学校が質の高い教育を子どもたちに提供できるようになり、子供たちが創造性や批判的思考、協調するコミュニケーション能力を育むことができるようになって欲しいと思います。そして、私自身がそれに関わり、できる限りコミットし続けたいと思っています。

よい人材なくして国の発展はありませんし、よい人材というのは学校が育むものです。

つまり、教育はとても重要な役割を果たしています。

教員養成大学も開校したばかりで、まだまだ課題は山積していますし、改善できるようにベストを尽くしていきたいと思っています。現在カンボジアでは、他の地域にも教員養成大学を設立していくという

計画があります。私たちは自分たちの経験を喜んで共有しますし、最大限サポートもしたいと思います。

- 昔を振り返って、小学生の頃の自分が目の前にいるとしたら、どんな言葉をかけたいですか？

決して諦めるな！ポジティブでいなさい！

自分にプレッシャーをかけすぎずに、それでも前に進み続ければ成功するよ、と伝えたいです。

小学生の頃の貧しかった自分の姿を思い返すと、高校を卒業できるなんて想像できませんでしたし、学士、修士、博士号を取得できるなんて信じられません。でも、努力し続ければ、自分の人生をよくしていけるのだと思います。

カンボジアにはこんな諺があります。

いつでも行動すれば、たどり着ける。

困難に遭遇したとしても、神様は決して見捨てない。

ありがとうございました。

- これからの益々のご活躍に期待します。



セン学長とのオンラインインタビューの一コマ(2023年7月)